

コロナ禍で進む日中地方間交流の兆し

9月中旬、山東省貿易促進会と静岡県にある世界緑茶協会・MIJBC(Made in Japan by China)センターとが共催で、日中茶文化オンライン交流商談会を開催しました。

山東省の人口は9500万人です。その山東省を代表する貿易促進団体である山東省貿易促進会は、現在オンラインを通じて様々な経済交流会を実施しています。

その一環として「お茶」が取り上げられ、日本一の茶産地である静岡県と交流をしたいと、すでに自治体間交流の仲介実績のあったMIJBCセンターに相談がありました。

静岡県は人口370万人、製造品出荷額が17兆円と自動車産業を中心に発展していますが、一方で、日本一高い富士山や日本一深い駿河湾と言った観光資源にも恵まれています。そして、海山の恩恵を受けた農水産品の質と量の豊富さも日本一で、その中でもお茶は日本一の生産量を誇っています。



しかし、最近の茶業は、消費の減少、茶価の低迷、耕作放棄の増加など悪循環が続いていて苦しんでいます。期待される海外展開では、お茶ブームに沸く大消費地の

中国への輸出が原発事故以降止まったままになっています。中国に対して、今最も日本側が期待することは「輸出規制」の撤廃です。

今回は、エントリーしていただいた静岡県内のお茶製造企業など 13 社と富士山静岡空港の企業内容を説明しました。山東省側の企業 4 社からも寒冷地での生産の努力など興味深い発表がありました。

発言の中で、中国高級茶が日本に入り、日本の茶農家が中国で抹茶を生産し、具体的な茶業展開や交流が以前に増して進んでいる様子がわかりました。

今回の試みは「まずお互いの茶業事情を知りあう」と言うことが目的でしたが、お茶の北限と言われ有名茶産地ではない山東省が、お茶を含めて一つ一つの省内産業を振興しようという省政府の気概が強く伝わってきました。そんな場面に接し、日本茶業者は「私たちも負けてはいられない！」そんな気持ちを持ちました。

今までなら開催にあたって、行ったり来たり、莫大な費用が掛かりました。行政でやる場合は、さらに事前調整として担当者が現地に出向きましたが、今回は事前打ち合わせもすべて zoom 会議でした。

コロナ感染は大きな禍をもたらしました。一方で、だからこそ今までなら考えもしなかったこのようなオンライン商談会を簡単に実施できるようになりました。

商談会に先立って 3 回の事前打ち合わせを zoom 会議で行いました。私も参加して、先方のトップと「意志を確認する対話の場」を 30 分ほど持つことができました。通常では考えられないことがいとも簡単に「ゼロ予算」で出来ました。

日本側の参加企業は、60 人(社・団体)ほど、中国側企業は 30 社ほどでしたが、それぞれ得るものはあったと思います。従来の交流会では、イベント後に大懇親会をやって「乾杯」も重要でした。私はお酒が好きでしたから、それがかなわなかったのは残念ですが、いつの日か近い時期にそれが叶うと確信しています。それまでは、このリモートツールを使って大いに相互交流を進めていきましょう。

これからも MIJBC センターは日本と中国の地方間経済交流の一助になれるよう努力してまいります。